

徳島大学「SIH 道場」改善に向けた新入生調査

塩川奈々美

徳島大学総合教育センター

1. 研究背景

徳島大学では、2014年度に文部科学省大学教育再生加速プログラム（AP）テーマⅠ「アクティブ・ラーニング」に選定され、2015年より全学1単位必修の初年次教育プログラムとして「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」を開講している。

本発表では、SIH 道場受講生を対象に実施した「SIH 道場受講後学生アンケート」の調査結果と自由記述にみられる学生の意識を分析することにより、SIH 道場の運用における効果と課題について検討する。

2. SIH 道場の取組

SIH 道場は1年次前期に開講され、学部学科ごとに15の教育プログラムを実施している。各プログラムにおいては、Ⅰ)専門分野の早期体験、Ⅱ)ラーニングスキル（文章力・プレゼンテーション力・協働力）の修得、Ⅲ)学修の振り返りの3つの設計項目が必須である。SIH 道場では、各教育プログラムに「SIH 道場授業設計コーディネーター」を任命し、実際に授業を担当する「授業担当者」と協力しながら、教育プログラムごとに設計された授業を展開している。また、SIH 道場に関連した授業設計、FD、個別相談、学生・教員アンケートについては筆者らが所属する教育改革推進部門が支援を行っている。

3. 分析対象

本発表では、2018年度のSIH 道場受講生1,344名を対象に実施した「SIH 道場受講後学生アンケート」のうち、(1)体験したSIH 道場プログラムについて問う10項目（4件法）と1日あたりの授業外学修時間に関する項目（5件法）、(2)SIH 道場のプログラムについて大学での学修を始める上で①役に立った点と②改善点に関する自由記述問題2項目の回答を分析対象とする。それぞれ分析対象件数は(1)952件（回収率71%；2018年11月1日時点）、(2)①役に立った点：767件、②改善点：509件であり、自由記述の回答からは「特に無し」

「ありません」など学生の意見が反映されていない記述は分析対象から除外した。

4. 方法

分析対象のデータのうち、「(1)体験したSIH 道場プログラムについて問う10項目」については、満足度を基準に集計を行った。「問10：SIH 道場のプログラムは全体的に満足できるものであった」（以下、問10と言う）の回答から、「4.とても満足した」「3.どちらかといえば満足した」を「満足した学生」に、「2.どちらかといえば満足していない」「1.まったく満足していない」を「満足しなかった学生」に集約し、それぞれの学生がSIH 道場をどのように振り返っているのか、残りの9項目（問1～問9）との関係を集計した。さらに、この満足度の高低と授業外学修時間の関係を求めた。

「(2)SIH 道場のプログラムについて大学での学修を始める上で①役に立った点と②改善点に関する自由記述」については、各学部学科で「文章力」「プレゼンテーション力」「協働力」「早期体験」に関する記述のうちどの要素に関する言及が多いのかを解析した。具体的方法として、テキストマイニング用フリーソフトKH Coderを活用し、コーディングルールに基づく語の出現頻度とカテゴリ間（学部学科×SIH 道場の各要素）の関係の強さを表すバブルプロットを作成した。バブルプロットの四角の大きさは出現頻度を表し、色の濃淡はPearsonのカイ二乗検定の結果に基づくカテゴリ間の関連の強さを示している。

作図の基盤となるコーディングルールはKH Coderで作成した抽出語リストに基づき作成している。コーディングルールは1つ1つの言葉ではなく、概念・コンセプト・事柄といったものの出現数を数えることを目的としている（樋口2014）。名詞・形容詞・動詞などを中心に抽出語リストに確認された語が使用された文脈を確認し、「文章力」「プレゼンテーション力」「協働力」「早期体験」「その他」に分類・集計を行った。語によっては複数のコードに当てはまったり、いずれのコードにも当てはまらないものがあつたりしたため、

